

小宮山宏著「課題先進国日本 キャッチアップからフロントランナーへ」

中央公論新社 2007年9月10日刊を読む

日本人への応援歌

1. 日本は明治維新の際に、当時の先進国に後れをとっていた産業生産力で追いつくべく、富国強兵に励んだ。その際、政治制度、教育制度、郵便制度、警察制度など、ほとんどすべての社会制度をつくり変えるという手法をとった。それが成功した背景には、藩校、寺子屋、飛脚といった、欧米に優るとも劣らない江戸時代の文明の基盤もあったのであるが、現実に行ったことは、あらゆる分野で欧米モデルを導入することであった。そして、太平洋戦争に突入する直前には、その産業生産力はほとんど列強と肩を並べようというところまで高まったのである。
2. 日本は太平洋戦争の敗戦によって、ほとんどすべての社会基盤や産業基盤を失った。まさに、ゼロからの出発であった。再び、欧米のモデルを追いかけたわけではあるが、一度肩を並べかけた蓄積のゆえに、1945年の敗戦からわずか23年後の1968年に国内総生産GDPが世界第二位に達したのである。それは奇しくも、明治維新から100年後のことであった。
3. 敗戦後の復興は、実は単なる欧米の模倣ではなかったのではないだろうか。それは、先進的な苦悩を経験し、それを克服しての成長であった。苦悩の第一は公害問題であり、第二はエネルギーの不足であった。公害の多くは、狭い国土での高密度生産と職住近接とによって、日本で最も過酷に顕在化したものである。
4. エネルギーに関しては、明治維新後の石炭時代には相当の自給率で石炭を生産したのと比較して、石油時代に入って実質的に自給率はゼロになった。安い石油に依存した成長は賢明な選択であったが、石油価格の高騰に対する脆弱性をさらけ出したこともあったのである。
5. このように日本は、公害、エネルギー不足という課題、いわば先進的な課題を、他国に先駆けて克服した経験を有する。つまり、明治維新後の成長は、欧米モデルの模倣によってなされたものであったが、太平洋戦争敗戦後の成長は、模倣であると同時に、意識的ではないが、自ら先進的な課題を克服した先進国的過程でもあったのである。
6. そしていよいよ、日本は課題先進国となった。これから前に進む手法は、明治維新の時代のように、欧米の社会制度を導入するといったものではない。太平洋戦争敗戦後のように、欧米モデルの模倣を基盤としつつも、無意識に自ら先端的課題の解決も図るといったものでもない。自らの意志と能力によって自らの課題を解決する、それが人類の未来を切り開く道だ

と、はっきり意識して、誇りを持って、荒野を進むことなのである。

7. 私が「日本は課題先進国だ」といい、「課題解決先進国になれ、日本はそれができるのだ、日本はきわめて良い位置にあるのだ」といっているのは、日本人に対する応援歌を歌っているのである。

P247 ~ 248

[コメント]

どんな時でも日本のよさをテコにピンチをチャンスにすること。よく考えれば日本は世界のかかえる課題の先進国なのだという小宮山東大総長の考えは、我々に元気と勇気を与えてくれる。

- 2009年7月20日林明夫記 -